

第2分科会「響き合う心が育つ飼育体験」

武井しな

1はじめに

本園は、神奈川県川崎市中部の住宅地に位置している。園児数488名、各学年6クラスのあそびを大切にした大規模園である。

地域には新興住宅地が多く、安心してあそぶことの出来る空間や、自然環境が減少してきていることから、園内に、ビオトープや田んぼ、ザリガニ池、雑草園などを配し、子ども達が触れながら、あそび、学ぶことの出来る豊かな自然環境の整備に努めている。

そこで、子ども達は様々な生き物と出会う。ダンゴムシ・ザリガニ・クワガタ・モルモットなど。生き物との出会いは、子ども達の不思議さに目を見はる感性を刺激し、興味・関心を広げていく。生き物との出会いを通して感じたこと、体験したことを土台に、年長児でクラスごとに行うウサギかモルモットの飼育活動へ繋げていくことを大切にしている。

また、生き物との出会いや、飼育活動において、仲間や保育者がいることの意味は大きいと考える。発見や感動が大きくなるだけでなく、仲間同士、子どもと生き物との響き合いに繋がっていると感じるからである。人と響き合える心の育ちに飼育活動は有効であると思う。

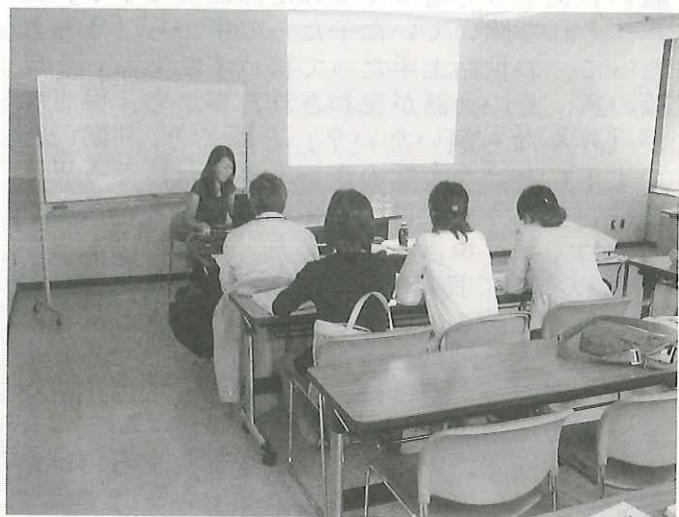
今回、このような発表の機会を与えていただき、自園での生き物との出会いから、飼育活動が子ども達にどのような育ちを与えていたか、飼育動物がいることの意味について検討してみた。

2 研究主題

研究主題は、飼育体験を行うことで見られる、心情や行動の変化、仲間と響き合う心の育ちを事例から明らかにすることとした。

飼育動物との関わりの中で、自分の手からエサを食べてくれる喜びや、抱っこしたときの温もり、撫でたときのふわふわする心地よさを感じた子ども達は、より積極的に、主体的に生き物と関わるようになり、仲間と発見や驚き、感動を伝え合うようになる。かわいいと思う気持ちは、動きや表情、特徴をよく見る目を育て、色々な気づきを生む。世話を通して、生き物の気持ちを考えたり、心配したり、喜んだりする事で、愛しいという気持ちが生まれ、思いやりの心が育つだけでなく、仲間と協力しながら世話を楽しむ主体性も育まれていると感じる。

この研究では、本園で大切にしている飼育活



動の3つのステップにわけて、それぞれの段階での育ちを検討した。

<ステップ①>自ら触れたくなる生き物との出会い

<ステップ②>飼育のはじまり（自分たちで捕まえた身近な生き物の飼育）

<ステップ③>飼育経験

3 研究内容

上記のそれぞれのステップの中での育ちを検討する際、3つの視点を元に考えた。

- ・生き物とどう関わっているか
- ・保育者が大切にしたい事とその援助について
- ・生き物を通しての仲間との関係性

<ステップ①>自ら触れたくなる生き物との出会い



この事例では、ダンゴムシに触れる3歳児の姿をとりあげた。生き物に触れることを沢山経験して欲しいと考えるステップである。

このステップでの生き物との関わりは、ツン

と触ると丸まるダンゴムシっておもしろい！手に乗せてみると沢山動く足がくすぐったい！ダンゴムシに触れる中で、近くにいる友達と、「わー！」「キャー！」言いながら、感覚的な共感が生まれる。いっぱい集めて手に乗せる子、友達が触っているのをじっくりのぞき込む子と、触れ方は様々である。

「背中に黄色い点々があるよ」「お腹にちっちゃいダンゴムシがいっぱいくっついてる！」繰り返し触っていると色々な発見が生まれ、感動を保育者に伝えてくるようになる。

保育者の援助としては友達と共に感できるよう、周囲に発見を伝えたり、共に楽しみながら触れることが重要である。生き物と沢山出会わせてあげることの大切さを実感している。

生き物を通しての仲間との関係性はまだ薄い時期ではあるが、同じ生き物に興味を持った子ども達が集まることで、生き物が入園・進級当初の不安感をなくしたり、関係作りに一役かってくれていると感じる。個々に、「生き物っておもしろい！」という興味を深めていって欲しいと考えるステップである。

<ステップ②>飼育のはじまり（自分たちで捕まってきた身近な生き物の飼育）

この事例では、クワガタ捕りを行う5歳児6月の姿をとりあげた。

生き物との関わりを通して動きや、特徴などに目を向け、おもしろがる心を育んで欲しいと考えるステップである。

びわの木に住んでいるクワガタを捕まえるため、仲間と知恵を働かせた子ども達。「クワガタって樹液が好きなんだって」仲間の一言から、樹液を作る方法を家で母親と調べてきた。興味を持った仲間が材料を持ちより、樹液大作戦の決行をおもしろがる姿が見られた。この時、わからないことを、おうちの人と図鑑や本を使って調べたり、試行錯誤した経験は、その後の遊びや生活を支えたように思う。生き物との関わりは、遊びであり、学びも多いものであることを実感した。



子ども達のクワガタへの興味は、樹液作りという実験的な遊びに発展し、科学的興味が生まれたことで、クワガタに興味のなかった仲間にも派生していった。作戦の成功によって手にした1匹のクワガタをめぐって誰の物にするかケンカも起きたが、「物じゃないんだからぼくら組みんなで飼えばいい」と自分たちで捕まえた物を飼いたいという強い思いが生まれ、あそびの中での飼育がはじまった。

「飼うためには何が必要か？」を共に考え、「クワガタの遊び場を作つてあげよう」という思いも生まれてきた。生き物との関わりをおもしろがる心は知的好奇心や、主体性を生み、生き物の気持ちを考えようとする心も育んでくれると考える。

ステップ①を経験し、興味関心の深まりから、知的好奇心を持って生き物との関わりをおもしろがる姿が見られるようになっていった。

保育者の援助としては、子ども達の発見や気づきに共感し、疑問に思ったことに対して答えを出すのではなく、「どうしてかな？」など、共に考える姿勢を大切に、考えたことを試してみることが出来る援助が必要であると思う。

生き物を通しての仲間との関係性は、ステップ①に比べ同じ生き物に興味を持った仲間と発見や疑問を伝え合う関係性が見られるようになつた。

<ステップ③>
飼育体験

ここでは、年長児のモルモット飼育の事例をとりあげた。

昨年11月「うーたんここで待つてね」だっこをしてカゴに移してあげてから、自らゲージの掃除を始めた女児の姿が見られた。「うんちくさい」「おしゃべり」



っこで新聞が濡れてるから嫌」と世話をすることに抵抗を感じていた子も、モルモットの動きに興味を持ち、えさをあげたり、抱っこをしてぬくもりを感じるなど、嬉しい経験を重ね、繰り返し世話をしていく中で、愛着を持っていく。

しかし、生き物が苦手な子もいる。少しでも、「かわいい」「おもしろい」と思える気持ちが育つよう、4月には前年度の年長クラスから引き継いだ際、モルモットの出会いの場として、

全員が餌をあげ、撫でてみる機会を設けた。それから繰り返し、世話をしたり、触れたり、呼びかけたりしていくことで「お掃除してあげよう」と思いやる心を動かしたり、「遊び場を作つてあげよう」など、心情や行動の変化が見られるようになっていった。

保育者の援助としては、進級当初は保育者自ら率先してゲージの掃除を行い、動きのおもしろさやかわいさに気づけるような発信することを心がけた。「みんなが赤ちゃんの時はお母さんが臭いオムツ取り替えてくれたんだよね」こんな話しさをしたり、仲間の気づきや発見を紹介する場を設け、関わりの少ない子も関心を向けられるような配慮をした。また、「どんな気持ちかな?」とモルモットの気持ちを考えられるような投げ掛けをし、クラスみんなで考える時間を持つ。また、保育者がお弁当の時間に「一緒にお昼ご飯にしよう」と野菜を一切れあげ、クラスの一員として愛情を持って関わる姿を見せるなどの配慮と援助、価値観を伝える時間も大切にしていった。飼育活動において、保育者の役割はとても大きいと感じる。協力して頂ける家庭には、休園日にモルモットを預かってもらい、保護者の方にも愛着を持って頂けたことは、子ども達の愛着心の深まりにも影響を与えたと思う。

これらの生活を通して、モルモットのお父さんお母さんは自分たちであることを少しずつ自覚し責任感が芽生えていく。

生き物を通しての仲間との関係性は、「エサを持っていくとキューキュー鳴くよ」友達の発見をクラスの仲間と共有して喜んだり、友達の世話の仕方を見て刺激を受け、学びあったりする姿が見られた。モルモットとの関係だけでなく、一緒に関わる仲間と響き合える関係性も深めていることを強く感じる。

4 考察・まとめ

これらの事例から、飼育動物は子どもの心を動かしてくれるだけでなく、子ども同士の心や関係性を繋ぐ素晴らしい存在であると思う。と、同時に、飼育活動は今後の育ちを支える土台作りとして幼児期に必要な経験であると感じた。

ステップ①②の育ちとしては、飼育の前段階として自園で大切にしている、生き物に触れるここと、おもしろがることのステップで、身近な生き物に沢山触れることで、生き物への興味、知的好奇心が育まれることが挙げられる。

②の飼育では、捕まってきた虫をゲージの中に放置してしまったり、世話の仕方を間違えて死なせてしまうこともあった。この時、保育者が価値観を伝えることが重要であると思う。命あることを伝えると、子ども達の表情はハッと

し、どうすれば良かったのかと一緒に考えることで、命の尊さに気付いていくと思う。この過程が大切であると考える。

このような、ステップ①②での育ちを保障するためには、下記の2点が必要であると思う。

- ・生き物を呼び込むための環境整備(ハード面)
- ・子ども自ら生き物に興味を持ち、触れたくなるような環境設定と、保育者の関わり

ハード面での環境整備は、園長先生や設置者の方と話し合いながら、建学の精神や教育理念を基に、生き物との出会いが沢山生まれるような環境を整えていくことが大切であると思う。

保育者の環境設定では、子ども達に感じて欲しいことや、子ども達の気づきなどを反映させ、保育者の願いを込めて、環境を作つて行きたい。

ステップ③の飼育活動を通しての育ちとしては、発見や感動を共感する心、愛おしいと思う心・思いやる心が育ったと思う。ステップ①②での育ちを土台に、飼育活動を通して動物を愛おしいと思う心、思いやる心が芽生えて来たように思う。繰り返し世話をすることで、仲間と協力したり、役割分担する姿が見られるなど協同性も育まれていくことを感じた。

③の事例に見られる、モルモットへの「お掃除してあげたい」という思いやる心の表れや、心情や行動の変化は、クラスの仲間と「おもしろいね」「かわいいね」と共感し、発見や感動を共有し合ってきたからこそその姿であると思う。この経験が人と響き合える心を育む根っこ作りになっていると信じている。また、責任感や、仲間と響き合う関係性の育ちも見られた。

だからこそ、心の柔らかい幼児期に生き物に触れ、飼育経験をすることが大切なことではないだろうか。

このようなステップ③での育ちを保障するためには、下記の2点が必要であると思う。

- ・保育者自身が愛着を持って関わっていく姿勢
- ・飼育する動物の生態や飼育の仕方の把握

保育者自身がみずみずしい感性を持ち、不思議に目を見張る感性と愛着を持って関わっていくことの重要性を改めて感じた。

この研究を通して、教育要領「環境」の領域の内容の中で謳われている「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」という育ちが飼育活動において見られる事を実感できた。

今後も、職員、保護者、獣医師との連携を深めながら、自園でのステップを大切に飼育活動を通しての育ちを支えていきたい。

(亀ヶ谷学園宮前幼稚園教諭)